

# 蓼科牧場附近のキノコ〔Ⅱ〕

## Mushrooms near the Tateshina meadows〔Ⅱ〕

稲垣清二郎

Seijiro Inagaki

さきに著者は蓼科牧場附近のキノコ<sup>1)</sup>を昭和36年より同47年に至る11年間、7月10日から10月20日までの採集期日に、5日、24科、142種のキノコを採集して日本菌学会報に発表し、今回は本年8月19日2日、10科、21種を採集したので第2報として報告する。

鈴木輝子ら5人は特定研究(卒業論文)として紅茶キノコを自然科学研究室にて7月行ない、紅茶キノコは酵母菌、酢酸菌および乳酸菌の混合物よりなり、キノコとは全く異なる菌よりなることを知ったのである。そしてその異同を実際のキノコについて見るために蓼科牧場に行き採集を行なった。

採集したキノコについて分類し、和名、学名を列記すると次のようになる。

### (A) ヒダナンタケ目 Aphyllophorales

#### I ホウキタケ科 Clavariaceae

1. チャホウキタケ *Ramaria stricta* (pers.) Quel.

#### II アンズタケ科 Cantharellaceae

2. ウスタケ *Cantharellus floccosus* Schw.

#### III サルノコシカケ科 Polyporaceae

3. アオロウジ *Polyporus caeruleopolus* Peck
4. カワラタケ *Coriolus versicola* (Fr.) Quel.

### (B) ハラタケ目 Agaricales

#### IV キシメジ科 Tricholomataceae

5. ツエタケ *Oudemansiella radicata* (Fr.) Sing.
6. コンメジ *Lyophyllum* Sp. 新称

#### V テングタケ科 Amanitaceae

7. タマゴテングタケ *Amanita phalloides* (Fr.) Secr.

#### VI ヒトヨタケ科 Coprinaceae

8. イタチタケ *Psathyrella Candolleana* (Fr.) maire

9. マグソタケ *Paneolus fimicola* (Fr.) Quel.

#### VII モエギタケ科 Strophariaceae

10. ニガクリタケ *Naematoloma fasciculare* (Fr.) Karst.

#### VIII フウセンタケ科 Cortinariaceae

11. アセタケ *Inocybe rimosa* (Fr.) Quel.
12. オオドマヤタケ I. *umbrinella* Beres

#### IX イクチ科 Boletaceae

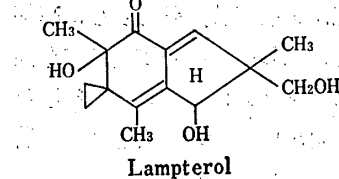
13. アミタケ *Suillus bovinus* (Fr.) O. Kuntze.

#### X ベニタケ科 Russulaceae

14. クサハツ *Russula foeteus* (Fr.) Fr.
15. ドクベニタケ R. *emetica* (Fr.) S. F. Gray
16. ヒロハチチタケ *Lactarius hygrophoroides* Berk et Br.
17. チチタケ L. *volemus* (Fr.) Fr.
18. キチチタケ L. *chrysorhens* Fr.
19. ツチカブリ L. *Piperatus* (Fr.) S. F. Gray
20. ウズハツ L. *Violascens* Fr.
21. カワチチタケ L. *Piperatus* (Fr.) S. F. Gray f. *pergamenus* (Fr.) Imai

採集したキノコ21種のうち今回始めてのものはチャホウキタケ、コンメジ、ヒロハチチタケおよびキチチタケの4種で、他は日本菌学会会報に発表したものである。今回新しく採集した4種のうちのコンメジは蓼科牧場内にて2本採集したもので傘、軸の色、形態ともにホンシメジと全く同様であるが、傘の径6—8mm、軸の長さ1.6cm~1.8cmなる小形で、軸の形はホンシメジと同様下部は著しくふくらんでいる。傘軸の肉は白色、ヒダは直生密で白色であった。著者らは発生場所および形態などの点からホンシメジと区別してコンメジなる新和名を与えた。

サルノコシカケ科のアオロウジおよびカワラタケは最近制がん剤として問題になっているものであるが、そのうちのカワラタケは数年前青森県、弘前病院で、ガンで見放された患者がカワラタケでよくなったというので評判になり近日新薬として発売されると新聞に報道された。

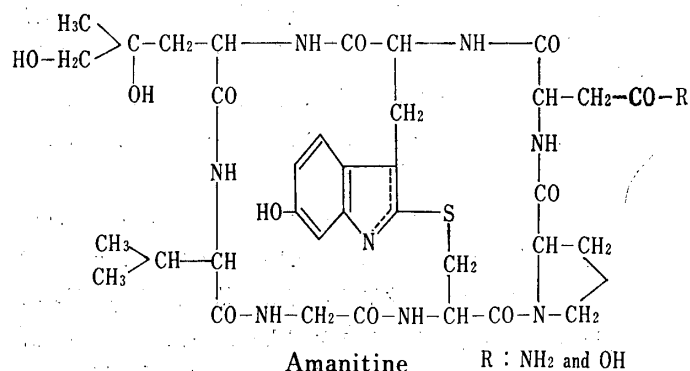
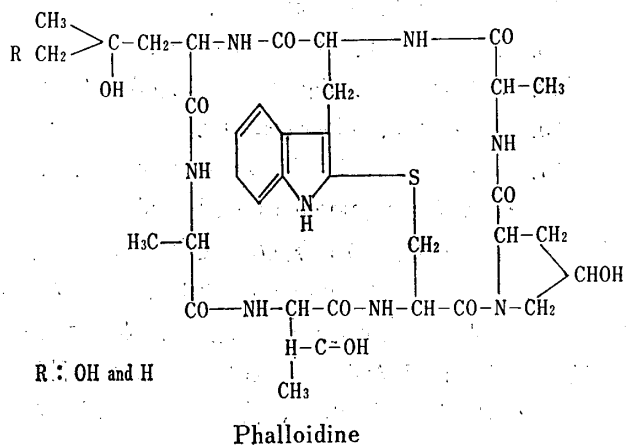


キノコを制がん剤として発表したのは著者は中西香爾教授(現コ

ロンビア大学教授)と共同で研究し、月夜茸の有毒成分 Lampterol を単離し、これが東京大学の小松信彦博士により制ガン作用が確認されたのが始めて、昭和38年1963年のことである<sup>2)</sup>。

テングタケ科のものとしては今回はタマゴテングタケ1種であるが、今までにベニテングタケ、テングタケなど11種採集している。この属のものには毒性のものが多く、タマゴテングタケもその一つである。タマゴテングタケは日本、中国および欧米にも発生する有毒キノコで一見地味な色彩をもち、食菌として誤食される例が多いが恐るべき猛毒菌である。

このタマゴテングタケの有毒成分はドイツの T. Wieland (フランクフルト大学教授)が親の H. Wieland (フライブルグ大学教授)と親子2代の30年間にわたって本草の有毒成分の研究をつづけ Amanitin と Phalloidine を単離、構造も決定して昭和39年4月(1964)京都市で開催された国際天然物化学会議で発表した。



著者は紅茶キノコの研究が動機で特定研究者らに高等菌類であるキノコ採集を行なはしめ、蓼科牧場にて今回始めて採集せる4種のうちコンメジはホンシメジと色彩、形態は近似せるも、発生場所、傘軸の大きさから著者らは新種と認め新和名コンメジとした。

なお著者と中西香爾教授との共同研究による月夜茸より制ガン作用のある Lampterol の単離がきっかけとなり、最近制ガン剤としてとくに脚光をあびたサルノコシカケ科のアオロウジ、カワラタケおよびテングタケ科のタマゴテングタケについて若干著者の知見を述べた。

著者らの採集したキノコ標本は本学の自然科学実験室に保存し、キノコ分類は主として今関、本郷、椿らの著書菌類によった<sup>3)</sup>。

謝辞 終りにのぞみ自然科学研究室にて紅茶キノコ成分の研究班に属し、そして蓼科牧場にてキノコ採集に協力された鈴木輝子、蘇原悦子、田尾恵子、栗原みどり、菊原富美子諸子に感謝する。

#### 文 献

- 1) 日本菌学会会報 第13巻3号231—238頁(1972) 蓼科牧場附近のキノコ
- 2) 薬学雑誌 83 377 (1963) 月夜茸から Lampterol の単離
- 3) 標準原色図鑑全集14 菌類、(キノコ、カビ) 保育社発行 昭和45年9月

(昭和50年10月)